

令和 3 年 11 月 24 日  
香川県農業試験場病害虫防除所

### ビワキジラミの開花初期の防除を徹底してください！

令和3年3月に香川県全域でビワキジラミの発生を確認し、主要産地で被害が見られました。令和4年産ビワにおいても、本害虫の被害が懸念されるため、開花初期の基幹防除を徹底し、生息密度を低下させましょう。

#### 1. 発生状況とビワの生育状況

- (1) ビワキジラミは、平成28年6月に東かがわ市の山間部で初発生を確認して以降、生息域を拡大し、令和3年3月には県下ほぼ全域で発生を確認した（図1）。
- (2) 令和3年産ビワにおいて、県下の主要産地で本害虫の排泄物による被害を確認した。
- (3) 本害虫の花房・果実における発生活長は以下のとおりである（図2）。
- (4) ビワ代表品種の開花始期については、府中果樹研究所における平年値を参考にする。  
長崎早生（平年：11月10日）、茂木（平年：11月29日）、田中（平年：12月1日）

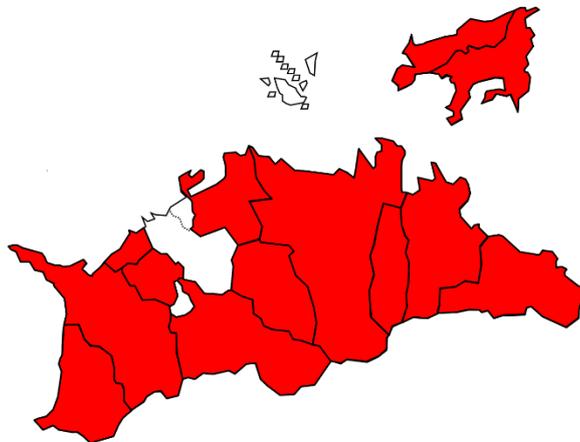


図1 香川県内のビワキジラミ発生市町（令和3年3月時点）

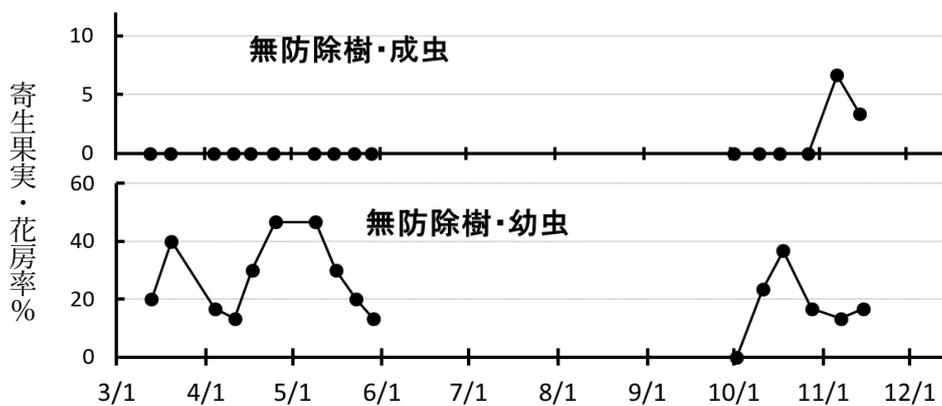


図2 果実・花房におけるビワキジラミの発生活長（高松市飯田町 2019年）

## 2. 防除対策および実施上の留意点

- (1) サンマイト水和剤 3,000倍（使用時期：収穫3日前まで、使用回数：2回）に必ず浸達性の高い展着剤（まくぴか 5,000倍）を加用して、薬剤を散布する。
- (2) 11月中旬頃からの開花初期に、本害虫が多く生息している花蕾や新梢の先端部を中心に薬剤を散布する。薬剤散布の際は、上記の箇所を正確に狙えるピストルノズル（図3）を用いることを推奨する。
- (3) 特に、花蕾が固く締まった状態（図4）では、薬剤が、花房の奥深くまで浸透しにくく、隙間に潜む本害虫にかからないおそれがある。そのため、花房全体がある程度伸長して、花蕾に隙間ができた状態（図5）か、または、摘房・摘蕾を実施した後に防除を行うことで防除効果が高まる。
- (4) 薬剤の散布量は、10aあたり少なくとも300L以上は散布する。樹高3m以上、樹冠部直径4～5m以上の成木には、1樹あたり20～30Lの散布量が必要である（図6）。
- (5) 樹が高く枝が密接していると防除作業の効率が低下し、薬剤のかけむらが生じるため、不要な枝を切除し低樹高にすることが望ましい。



図3 ピストル噴口 AF-5（永田製作所）と散布の様子



図4 花蕾が固く締まった状態  
(薬剤が浸透しにくい)



図5 花蕾に隙間ができた状態  
(薬剤が浸透しやすい)

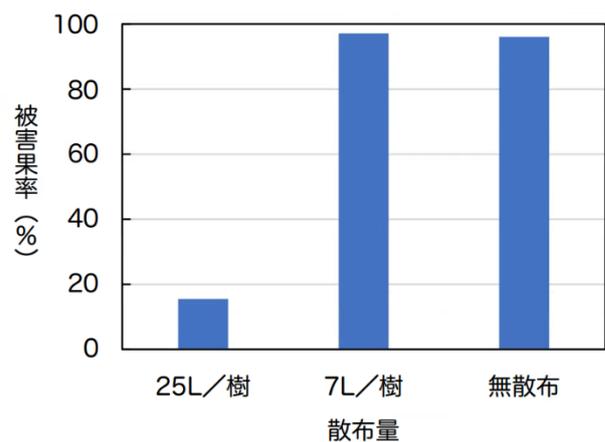


図6 散布量と被害果率の関係  
(散布量が少ないと防除効果が得られない)